

出土品が語る知多のあけぼの

人間は太古の昔から「道具」を作ってきた。自然の木の枝や石を利用したものが、削る・叩く・磨くなどの加工技術の発明で道具が生まれた。道具はより多くの食料をもたらし、やがて「土器」も作られて生活を豊かにした。

日本における土器は縄文土器に始まり、稲作農業とともに弥生土器が広まった。次の古墳時代には弥生土器から発展した土師器と、大陸の新しい技法で作られた須恵器との2種類が作られ、日本の焼き物の元となった。

●貝塚

食料とした貝殻や動物・魚類の骨、不要な土器片が人間の住居付近に捨てられて堆積してできたもの。単なるごみ捨て場ではなく、人や犬が埋葬された例もある。

●石器

石を材料にして作られた刃物で、打撃・剥離して作られる打製石器と、研磨して作られる磨製石器がある。

●縄文土器

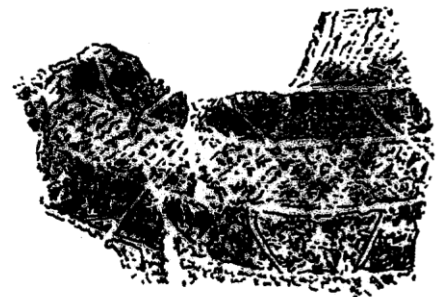
縄文時代に作られた土器で、表面に施された縄目の文様が特徴。その他に貝殻を使ったり、竹の管を半分にして付けた文様もある。土器の種類は深鉢が主で、尖底・丸底が多いが、次第に平底に変わっていく。

●弥生土器

弥生時代に作られた土器で、米作りとともに北九州から広まった。用途に応じて貯蔵用の壺、煮炊き用の甕、盛り器としての高坏・鉢などに分かれていた。文様は篋や櫛で描いたり、貝殻や縄目で付けてある。



縄文土器の文様



弥生土器の文様

● 埴輪

素焼きの土製品で、円筒埴輪と形象埴輪に分けられる。各種の器物や人物・動物の形を作り、古墳の頂上や斜面に立てられた。

● 土師器

弥生土器から発展し、古墳時代から奈良・平安時代まで作られた、赤色の素焼き土器。850℃前後で焼かれ、ほとんど装飾的文様が無い。

● 須恵器

古墳時代の中頃から日本で作られた陶質の土器。成形にロクロを使い、窖窯で1,000℃以上で焼かれ、青灰色でかなり硬い。

展示資料の遺跡名

- 1 野崎遺跡
- 2 下内橋遺跡
- 3 法海寺遺跡
- 4 細見遺跡
- 5 大廻間遺跡
- 6 二股貝塚

